

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4570102279		
法人名	社会福祉法人 春生会		
事業所名	希望山荘		
所在地	宮崎市大字郡司分乙1590-1		
自己評価作成日	平成26年6月1日	評価結果市町村受理日	平成26年8月11日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/45/index.php?action=kouhyou_detail_2013_022_kani=true&JigyosyoCd=4570102279-00&PrefCd=45&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会		
所在地	宮崎市原町2番22号宮崎県総合福祉センター本館3階		
訪問調査日	平成26年7月11日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

本施設の理念にもあるように「安心して穏やかに、明るく楽しく、生活ができる」ように、入居者様のありのままを受け止めてその人らしく暮らせるように、一人ひとりの入居者様へ対応している。年々入居者様が高齢化し、車椅子での生活を余儀なくされた方が増えているが、毎月、半日ドライブを組み入れたり、年2回の外出ドライブを計画し、外出にも心掛けている。また、年2回はバーベキュー大会を企画し、家族や近隣の方々に参加して頂いて、家族や地域とのつながりを持っている。避難訓練は毎月行っているが、年2回総合訓練を行い、夜間想定訓練には消防署や近隣の方々に参加してもらっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

敷地内に自由に入ることでもでき、閉鎖感がなく地域の一員として溶け込んでいるホームである。運営推進会議も活発に意見や要望が出されており、ホームは、それらの意見・要望を行事運営やボランティアの受け入れ、実際のケアに確実につなげている。モニタリングやカンファレンスを職員全員で行い、「認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式」のシートを活用するなど、一人ひとりに合った生活支援の計画作りに真摯に取り組んでいる。管理者、計画作成担当者が、職員一人ひとりの意見や提案を重視し、何でも言い合える風通しの良いホーム作りに努めている。利用者の一日一日を大事にするという姿勢が強く感じられるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらい 3. 職員の1/3くらい 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらい 3. 家族等の1/3くらい 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年々高齢化し、車イス生活を余儀なくされている方が増えてきたが、施設内数ヶ所に理念を掲示していつでも見られるようにし、折りに触れ話し合い、それぞれの入居者に統一したケアを行うようにしている。	開設時の理念の見直しを職員全員で行い、現在4つの理念を定めている。玄関、廊下、トイレなどに掲示するとともに、職員会議などで理念の共有を徹底し実践している。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣の散歩に出掛け、挨拶を心掛けている。また、敷地内に自由に出入りできるので、子供たちや家族連れが遊びに来たり、自治会長さんが運営推進会議に参加され交流している。年2回のバーベキューには近隣の方を招待し、交流を深めている。	敷地への出入口に門扉などはなく、自由に地域の方や子供たちが出入りしている。散歩の時の挨拶はもちろんのこと、年2回行うバーベキュー会には、地域の方の参加も多い。ホームと地域との交流が良好に図られている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	バーベキューや避難訓練、運営推進会議等に参加して頂き、直接入居者様と触れ合ってもらったり、説明したりして、認知症について理解していただき、支援の仕方は様々あるということを知らせている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月分の取り組みを報告し、それに対して出た意見等を参考に、よりよい支援ができるように話し合い、サービスの向上を図っている。	運営推進会議の中で、ホームの活動内容を報告し意見を交えている。参加者からは、行事への協力やボランティアの紹介がなされ、ホームは、会議を生かした運営を行っている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	計画作成担当者がセンター方式の推進委員を受けたり、認知症サポーターをしたりして、市の担当者と連絡を取ったり、相談を行ったりして情報を得ている。	管理者、計画作成担当者は、認知症サポーターやケアマネジメントの推進事業協力委員を務めている。市の担当者との接点も多く、良好な協力関係が図れている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員全員が春生会のマニュアルを持っており、また、常時だれでもいつでも見れるように置いている。施設外研修に参加したり、勉強会を行ったりして、身体拘束のないケアに努めている。玄関は常時開放を行っている。	全職員が相互に勉強会を主催し、身体拘束についての理解を深めている。やむを得ず拘束をする場合も、マニュアルに沿った対応を行っている。身体はもとより、言葉の拘束をしないケアの実践に取り組んでいる。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に勉強会を行い、虐待防止について理解を深めたり、話し合ったりしている。また、カメラを設置し、防止に努めている。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	パンフレットや研修資料を全職員が目を通すようにして、学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時や退去時、料金改定時等に十分な時間を使って説明を行い、理解、納得をしていただいた上で、署名・捺印を頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時や行事等での来荘時に、意見や要望を訊ねている。相談や苦情は処理簿に記入し、全職員に回覧し、ミーティングや勉強会でも話し合っている。第三者委員会の開催時には、あがった苦情やその後の対応を報告している。	家族の来訪時や行事の時に、意見や要望が気軽に言えるような雰囲気づくりをしている。家族の希望を全職員で共有し、利用者の髪型や洋服を変更するなど、意見の反映に取り組んでいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や提案を聞く機会(ミーティングやブロック会議、カンファレンス等)を設けたり、普段の会話の中からも反映していくようにしている。	管理者は、職員会議で意見等が言いやすい雰囲気作りに努め、普段から職員と一緒に仕事をしながら、意見や要望を聞くようにしている。法人代表者も慰安旅行や行事などの機会に、職員の意見を積極的に聞いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	研修会に参加させたり、親睦会を開いたり、旅行を企画したりして、スタッフが働きやすい環境作りに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護系の内部研修を年6回企画したり、春生会の研修(サークル)を行ったり、認知症に関する研修等を順番に受けられるように計画している。研修後は、勉強会などで研修報告を行い、共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会に加入している。他施設との勉強会や研修、相互訪問等を行い、悩み等を話し合ったりして、サービスの向上に取り組んでいる。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に本人から直接話を聞き、その思いを受け止め、普段の生活の中で本人が安心して暮らせるように、コミュニケーションをとることに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が抱えている不安や問題点をしっかり受け止め、その思いが少しでも軽くなるように心掛け、家族との信頼関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人家族の要望等で、特別な医療を要すると判断した場合は、病院や主治医と話し合い、他施設を紹介したりするようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	今までの自宅での生活の延長として、大きな家族の一員として、職員も一緒に食事をしたり、会話を楽しんでいる。また、利用者の能力に応じて家事を一緒に行うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には最低でも月2回は面会に来て頂くようお願いしている。このようにして頂くことで、共に本人を支え、支援して行く関係作りが出来るようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の希望に沿って、以前の職場のある地域にドライブで行ったり、電話支援を行ったり、手紙で姉妹に近況報告を行ったり、馴染みの関係が途切れることがないように支援している。	利用者が、家族や知り合いへ電話をしたり、手紙を書く場合などに、支援を行っている。また、なじみの場所(以前勤めていた職場)を訪ねたり、その地区の出来事を伝えたり、積極的に継続支援に取り組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日頃から入居者同士の関係を把握し、食事やレクリエーション等の配席を考えたり、日常生活では、できる人が出来ない人の手伝いをしていくことで関わり合ったり、支えあったりできるようにし、孤立しないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された時はお見舞いに行ったり、面会に行ったり、電話での状態確認を行っている。また、家族の相談にも応じながら、必要な情報も伝えている。亡くなられた時は、通夜・告別式に行っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で、入居者の希望や意向を把握するように心掛け、希望に添える支援ができるように、申し送り時やカンファレンス等を利用して話し合っている。意思疎通の困難な場合は、表情等に注意して把握に努め、その人らしく暮らしていけるように取り組んでいる。	「認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式」のシートを活用したり、利用者の行動や表情から、希望や意向の把握に努めている。把握できたものは、全職員で共有するようにカンファレンスや申し送りで確認している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に情報収集を行い、アセスメントを行う事で、把握している。居室には家族の写真、今まで使っていたタンス、趣味の道具などを持参して頂いている。また、センター方式を活用して、全員で共有出来るようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケース記録や排泄チェック表、体重チェック表等で把握している。毎月、担当制でモニタリングを行い、状態把握し、カンファレンスで共有し、話し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月モニタリングを行い、本人や家族の要望を聞き、カンファレンスを行い、本人に今何が必要か等の意見交換を行っている。状態に変化があった場合や要望があった場合は、期間内でも見直しを行うようにしている。	本人、家族、ケア担当者からの意見や要望を聞き、モニタリングを行いながら介護計画を作成している。カンファレンスで把握された軽微な変化も、見直しの必要がある場合は随時対応している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者個々の24時間の行動や状況を具体的に記録している。原因や気づき等も記載し、職員間で情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族からの要望やその状況に応じて、外出支援、通院支援、買い物支援等を行い、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。		

宮崎県宮崎市 希望山荘(認知症対応型共同生活介護事業所)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の美容師さんに来荘してもらい、カット支援を行っている(有料)。民生委員さんや地区の人の紹介で、琴や尺八、踊り等のボランティア交流を行ったり、社会福祉協議会等で計画された運動会や音楽会にも出向いて楽しんでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、馴染みの医師や家族の希望する医師により受けている。歯科や眼科等も、家族の希望する医療機関を受診してもらったり、場合によっては職員が付き添っている。付き添った場合は家族に結果報告を行い、かかりつけ医とは連携を密に取り、良好な関係を築いている。	利用者、家族の希望するかかりつけ医との関係を大事にしている。家族での受診や往診対応が困難な場合は、職員が対応し、その内容をきちんと家族へ報告するなど、適切な医療を受けられるよう支援を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が1名しかいないので、入居者別に医療ノートを作成し、情報を全職員が共有できるようにしている。入居者に状態変化がある場合は、職場の看護師に状態報告をしたり、隣接する施設の看護師に尋ねたりしている。また、直接かかりつけ医に連絡して適切な医療を受けられるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院先を訪問し、担当看護師に経過を訊ねたり、カンファレンスを開催して頂いたりして、情報交換や相談等を行い、関係作りに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合の方針は、かかりつけ医と家族、職員とを交えて十分に話し合いを行っている。「看取りケアと重度化に関する重要事項説明書」を作成し、家族に署名・捺印して頂き交付し、全職員が対応できるように、勉強会等で話し合いも行っている。	看取りケア、重度化に関する文書を作成・準備し、家族へ説明を行い、同意を得ている。実際にその時期が来た時には、再度、家族に口頭で説明を行い、了解の上、かかりつけ医、家族と連携し、看取りケアを行っている。	文書での説明は、一度しか行っていないので、その時期が来た時に、再度、文書で説明・同意を得るような取組に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員が、緊急事態に対応できるように、研修等に参加している。また、緊急時のマニュアルを作成し、全職員がいつでも見て対応できるように、壁に貼ったり、所定の棚に置いている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年間計画を作成し、火災や地震、水害等の避難訓練を毎月実施している。また、地域住民、消防署員を迎えて、総合訓練及び夜間対応の火災訓練を年2回行っている。災害発生時に備えての食料や飲料も定期的に賞味期限をみて新しくしている。	毎月、災害に対する訓練を実施し、年2回の法定訓練では、地域住民や消防署の参加も得て、避難訓練を行っている。非常備蓄品(水や食糧など)も定期的に更新している。各居室の入り口には、車いすやベッドのイラストを表記して、避難時の混乱が軽減されるよう取り組んでいる。	

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室に入る際は必ずノックや声掛けを行っている。入居者一人ひとりの性格やこれまでの生活歴を把握し、自尊心を傷つける事のないように気をつけて対応している。プライバシー保護や個人情報保護についての勉強会も行っている。	居室に利用者がいない時でも、きちんと挨拶をして入室し、声掛けも適切に行うよう心掛けている。勉強会を行い、全職員が利用者の人格や誇り、プライバシーを理解し、尊厳を傷つけないよう気をつけて支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	レクリエーションの時間に、入居者に好きなものや行きたい所を常に聞いている。また、食事へのリクエストメニューを聞いて取り入れたり、外食では、メニュー表を借りてきて選んでいただいたり、ドライブで行きたいところを聞いたりして行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者一人ひとりの状態等を把握し、入浴の時間や順番を変えて希望に沿った支援を行ったり、レクリエーションの時間でも眠気があったり、疲れの訴えがあった場合などは、ベッドに横になってもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髪型に関しては、家族対応が困難な利用者一人ひとりの希望にあわせて、近所の美容室や出張理・美容を利用している。洋服に関しては、着替え時に一緒に選んだり、選ぶことの出来ない方にはその人らしい身だしなみを心掛けて支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	それぞれのADLに応じて食事形態を調整し、できるだけ自立摂取出来るようにしている。職員も介助しながら、入居者と一緒に食事を摂っている。月3回手作りおやつの日を設け、一緒に作ったり、盛り付けたりしている。また、管理栄養士が食べたい物調査を実施し、献立に反映している。	月に3回は手作りおやつを利用者と一緒に作り、年2回はリクエストメニューを献立に生かしている。意思疎通が困難な利用者への食事介助では、「〇〇です」と食材を言いながら口に運び、少しでも食事が楽しめるように支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は、同法人の管理栄養士が作成している。食べる量については個別記録で把握している。食べるのが進まない入居者には、スタッフが側に行き、声掛けしながら支援している。水分補給にも気をつけて、入浴後等は、ポカリやお茶等で一人ひとりに対応を心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後には、必ず口腔ケアを行っている。自分の歯の方には歯ブラシで、義歯の方には義歯洗いと就寝時にはボリデント洗浄、義歯のない方にはガーゼを用いた口腔ケアと、個々に応じたケアを行っている。歯科の協力医療機関と提携している。		

宮崎県宮崎市 希望山荘(認知症対応型共同生活介護事業所)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの状態を把握し、適宜にトイレ誘導を行っている。車椅子利用の立位できない方も、職員2人でトイレでの介助を行っている。日中は、歩行介助を行い、トイレでの排泄を心掛け、夜間も出来るだけトイレでの排泄支援に努めている。	排せつのパターンを把握して声掛けや誘導を行い、できる限りトイレでの排せつを心がけている。1人の職員で対応が難しい場合、職員を2人にして、トイレでの排せつが継続できるよう取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の朝の申し送りで、職員が共通に理解し、対応出来るようにしている。適度の運動や乳製品、水分補給等で、自然排便があるように力を入れている。それでも排便困難な時には、内服薬や坐薬で排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本的には1日おきの入浴であるが、入居者の希望に添えるようにしている。便失禁があった場合は入浴日だけでなくシャワー浴を行ったり、体調不良者には状態を見て清拭にしたり、時間を置いての入浴支援を行い、清潔保持に努めている。	基本は1日おきの入浴だが、時間や曜日は希望により柔軟に対応できる体制をとっている。必要があれば、随時の入浴も行っている。ゆず湯や入浴剤の利用、ゆっくりと職員と会話をするなど、少しでも入浴が楽しめるように配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの睡眠パターンを把握し、午睡を希望されるときや疲れが見られる時は、居室にて休息してもらっている。日中、レクリエーションに散歩等を取り入れたりして生活のリズム作りを行い、夜間も安心して気持ちよく眠れるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者一人ひとりに医療ノート・往診ノートを作成し、全職員がそれに目を通して症状を把握し、医師の指示通りに支援している。処方変更の際には、副作用等の症状の変化がないか観察して、主治医に報告するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	自宅にいる時のように、洗濯物たたみ等の手伝いや日曜大工風にネジのゆるみを回してもらったり、習字や日記を書いてもらったり、経験や能力を生かした支援を行っている。毎晩、眠前に養命酒を飲まれる方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	高齢化が進み、車イス利用者がふえているが、近隣の散歩には気候のよい時期にはよく行く。また、月1～2回はドライブで遠出をする機会を作っている。行き先は、入居者に行きたいところを尋ねたり、その時期の景勝地に行ったりしている。家族の支援があれば、外出・外泊も行っている。	近所の散歩はもちろんのこと、月に数回ドライブに行き、季節感を味わえるようにしている。また、年に数回はドライブがてら外食を楽しむなどの支援を行っている。家族の協力の下、外出したり外泊の支援も行っている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族から金銭を預かり、預かり書を発行し、出納簿を付けている。来荘時に報告し、出納簿の確認をして頂き、サインと押印をして戴いている。個人によっては、少しの金額(二千元程度)を所持している入居者もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族に電話をしたいと言われたら、職員が直接掛けて話して頂いている。また、贈り物や手紙が届いた時には、電話や手紙でお礼の返事をするようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	天窓の明るさを利用して、室内の照明を調整している。換気もこまめに行い、入居者が心地良く過ごせるように室温の調整を行っている。ホール(居間兼食堂)の掲示物は、毎月季節を感じられるよう変えている。また、催しごとに写真を張り、居心地の良い場所を提供するように心掛けている。	天窓を利用して、照明の調整を細かに行っている。換気、温度なども微調整を行いながら、利用者が居心地よく過ごせる空間作りに取り組んでいる。居間の壁には、行事の写真を掲示し、利用者が見て楽しめるような工夫をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	3人掛け用のソファが二台あり、寄せたり、離したり、2人掛けにしたりと、状態に合わせて対応したり、1人掛けソファを利用したり、また、和室で過ごして頂いたり、一人ひとりの居場所作りを心掛けている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に、家族の方に使い慣れたものや好みの物が活かせるように働き掛けている。家族の写真や筆筒や大正琴などを持ち込まれ、その人らしい部屋で居心地良く暮らせるように支援している。	なじみのたんすや人形、趣味の大正琴、家族の写真など、家族の協力の下、一人ひとりに合った居室づくりを心掛けている。なじみのものに囲まれて、利用者が居心地よく過ごせるよう配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホールには、あまり物を置かないようにしてスペースを取り、シルバーカー、車イス等を利用しながら、個々の身体レベルに合わせ、できるだけ安全に、そして、自立した生活が出来るように配慮している。また、居室やホールから、トイレや浴槽に行きやすいように手すりを設置している。		